

東京教区時報

2003年4月6日発行
 日本聖公会東京教区
 港区芝公園3 6 18
 編集人 伊藤 裕元

【教会委員合同礼拝・祝福式説教】

2003年1月25日・聖アンデレ主教座聖堂

教会委員合同礼拝 説教



主教 植田仁太郎

〔詩編〕第62編1節、5節 わたしは静かに神を待つ、わたしの救いは神から来る。わたしは静かに神を待つ、わたしの希望は神のうちにある。

〔ホセア書〕第6章1節、2節 さあ、我々は主のもとに帰ろう。主は我々を引き裂かれたが、いやし 我々を打たれたが、傷を包んでくださる。一日の後、主は我々を生かし 三日目に、立ち上がらせてくださる。

〔テモテへの手紙1〕第4章10節 わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです。

今日は、この教会委員の合同礼拝と祝福式にご参加下さいまして、本当にありがとうございます。数年前までは、教区全体で新年礼拝を致しまして、お互いに新年を祝い、決意を新たに

持だつただらうと思えます。

折角、そういう教区会以外に

たびに、教会委員としてみなさんから選ばれている方々が、教会にとつてどんなに大切な働きをして下さっているか、そして

が主教の職に任じられました。私ももうじぎ二年になりますが、

教区の皆さまに集まっていただけ機会があつたのに、全然それを無くしてしまう、というのも残念に思い、何かの形でそういう機会を設けたい、と思いましたが、今日の礼拝を行うことにした第一の理由です。もうひとつ理由がございます。私が主教の職を与えられ、各教会を巡回している中で、各教会の教会委員さんとお会いしお話しする

に、何と多くの方々が無言と精を出して下さっているかに、改めて大変心を打たれました。

が主教の職に任じられますが、

この教区事務所にもいつも出入りしている者たちが、特に主教は、教区会とか常置委員とか、教区代議員とか 委員会

とかの働きによって教区が動い

て新年を祝うという気持ち

たが、皆様も恐らく同じお気

持

持

持

持

ているかのようにとかく錯覚し勝ちですが、実は、そうではない、各教会で信徒と聖職の間立って苦勞してください

ている教会委員の務めを果たして下さる方があって、初めて、教会が働き、教区が働いているんだということを、

もつとはつきりと認識しなければならぬ、この方々とも祈り、お互いに励まし合わなければならないと思いましたが、今日のこの礼拝を企画致しました第二の理由です。

さて、今日の礼拝は、私も、ここに連なって下さっている同僚聖職も、そして皆さんも、神さまから与えられている務めに何よりも謙虚であらねばならないというつもりで、ともに嘆願をささげるといのが後半になっていきます。そして、前半、今まで読み、唱えてきました聖書と詩

編のテーマとなっているのは、「希望」です。

詩編62編作者の希望

最初に唱えました詩編第62編は、「わたしは静かに神を待つ」ということばで始まり

す。これは、この二年間私の心の奥底にあつた気持でもありません。世の中一般からも、教会からも、あまりいいニュースは聞こえてこない。時にはムツとしたくなるようなこと

もある。私が主教という恐れ多い務めに任じられたのは、こんなことをするためだったのだろうか。人々は、教会の方々も、その他の友人達も、こんなことを期待していたのだろうか。神さまは、私に何をしろ、と仰っているのだろうか。神さまは私たちに何をしろと仰っているのだろうか。あの人はあゝ言い、この人はこう言う、そう言う人もま

た、どうするのが一番良いのかわからず苦しんでいる。誰もアツと驚くような解決、誰もみんなが納得するような解決を与えることができない。

「わたしは静かに神を待つ」。じたばたするな！「わたしは静かに神を待つ」。しかもこの言葉は5節にも、もう一度出てきます。そしてこの詩編の作者は、ホツとしたように思い出します。「わたしの希望は神のうちにある」。

ホセアの悲鳴と希望

次に私たちは、第一日課でホセア書を読みました。冒頭は強烈です。「主は我々を引き裂かれたが、いやし、我々を打たれたが、傷を包んでくださる」。

私たちに振りかかった例の經理事件は、まさに、私たちを引き裂き、私たちを打ちのめしました。だれが悪い、だれが責任があると言っても始まり

ません。それが分かった時点で色んな形で、私たちがみんなが引き裂かれ、打ちのめされました。

ご存知のように、ホセアという預言者は、神さまから、身持ちの悪い女性と結婚せよと命じられて、非常に屈折した私生活を引き受けざるを得なかった特異な預言者です。そして、妻の子ではあつても自分の子ではない子を次々と家族として受け入れなければならなくなりました。

妻の不倫によつて出来た子に、恐ろしい名前がつけられます。「ロ・ルハマ、憐れまれることのない者」とか、「ロ・アンミ、わが民でない者」とか、空恐ろしい名前です。そういう複雑な家庭をかかえ、悩みながら、ホセアは、気付きます。この自分の状況は、神さまが神さまとイスラエルの民の関係が、このようにねじくれてしまっているよ、ということをもつ

て知らせよとなさったのだ、と気がきます。そして、イスラエル、エフライム、ユダの人々に警告し預言をします。6章のこの箇所は、神から悔改めを迫られたイスラエル、エフライム、ユダの人々が悲鳴をあげているところです。「神さまは、我々を引き裂いたがいやし、打ちのめされたが傷を包んでくださる方に違いない」とすがっているところ。そして、主は曙の光のように必ず現れ、我々を訪ねてくださる」という希望を表明します。

それはホセア自身の悲惨な家庭生活の中からの悲鳴と希望でもあったと思います。希望というのは、何も無い所に空しくあるものではありません。失われた信頼の中から、打ちひしがれている時に、その中から信頼を回復しつつ生まれるものが希望です。

組織化時代の教会

そしてその次に、私たちは、第二日課でテモテへの手紙を読みました。テモテは、偉大なパウロの弟子として使徒言行録にも、パウロの手紙にもしばしば登場します。テモテという人の名前は、パウロとともに初代教会の人々の間で、かなり良く知れ渡っていたようです。

このテモテへの手紙は、あたかも偉大なパウロが、その弟子に書いているような格好にして、つまり、パウロの権威を借りて、誰かが書いたもので、パウロ自身が書いたものではないし、テモテに対して書いたものでもないことははっきりしています。手紙の差出人とあて名人は、どうでも良いことです。では、あまり重要でないか、というところでもありません。パウロよりずっと後で書かれたようですから、本物のパウロの手紙とは書かれた時代背景や、書か

れた意図が違います。つまり、パウロの時代には、まだイエスのことを実際に知っていたり、またイエスのことを記憶したりしていた第一世代のクリスチャンが沢山居りましたが、もうこの手紙の書かれた頃、紀元後百年位ですが、第一世代の人々はとうにいなくなって、第三、第四世代のクリスチャン達の時代で、教会がいよいよ組織化される時代になっていきます。

つまり組織としての教会を成立させてゆく上でのマニュアルだといって良いでしょう。ですから、この文章は、聖職にも信徒にも、教会という組織を預る現代の私たちにとつても、そのまま、良くわかりません。そして、「わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いていけるからです」と言っています。

教会の歴史のどの時代にも、良心的な人々は、労苦し、奮闘したのでしょうか、この手紙を書いた人も、また読んだ人々も、教会の実状としては今の私たちとそう大差のない状況にあったらうと推測されます。そして、「労苦し奮闘できる」のは、「生ける神に希望を置いていける」からだと理解します。

この手紙を書き、そしてこの手紙を読んだ人々は、実は、教会の運営に責任を持つ人々の「マニュアル」であるこの手紙だけを頼りにしたのではなく、イエスの教えとなさったことを記した福音書のどれかひとつを、当然知っていたと思われま。福音書に伝えられるイエスの姿・十字架・復活に従いつつ、もう一方でこの手紙を教会運営のマニュアルとしました。イエスのなさったこと、教えたことを心に留めながら、希望を神

においているから、私たちは
 労苦し奮闘できるのだと言っ
 ています。これも私たちと同
 じです。

今日は改めて福音書を読み
 ませんでした。それは、私たち
 は、福音書のある箇所だけに
 注目するのではなくて、福音
 書に記されたイエスの教えた
 ことなされたこと全体を心に
 留めながら、希望というもの
 を考えたからです。私
 たちが希望を神に託すること

ができるのも、私たちが静か
 に神を待つことができるのも、
 そして、私たちが神に悲鳴
 を挙げつつ信頼できるのも、
 イエスのなさったこと、イエ
 スの教えたことがあるからで
 す。

ついでに奇跡

イエスのなさったことの多
 くは、人々に奇跡と映りまし
 た。イエスのなさったことの
 多くは、後の世の人々に奇跡

として記憶されました。悪霊
 が追い出され、病人が癒さ
 れ、水がブドウ酒に変わり、嵐が
 静まり、一晩中とれなかつた
 魚がイエスの指示で舟一杯と
 れたのも奇跡として映りまし
 た。私たちは、奇跡はイエスと
 イエスが生きた時代の人々に
 だけ起つたのであつて、現代
 のような不信仰の時代には滅
 多に起こらないだろうと考え
 ています。

しかし私には、教会の姿そ
 のものが、やせても枯れて
 も、ひとつの奇跡のように思
 えてなりません。

東京教区が、三五の会衆を
 擁し、年間三億四千万円もの
 予算を計上し、さらにその上
 に、一千五百万円もの献金を
 教会の外の働きに献げ、また
 各教会が直接用いている予算
 を勘定に入れれば、さらに何
 億円かを献げて下さっている
 のは、ほとんど奇跡のように
 思えてなりません。私を初

め、つたない聖職団の力を考
 えるとなおさらです。お金の
 ことばかり申しましたが、そ
 れだけでなく、お力ネや人が
 居ないと嘆きながら、カパ
 テイランを支え、ホームレス
 の人々への働きを支え、ぶど
 うのいえを支え、その他多
 くの働きを側面から支え、ど
 れだけ多くの人々の支えに
 なっているかを考えると、こ
 れまた奇跡のように思えてき
 ます。

また皆さんとともに、もつ
 と教会に生涯を捧げる聖職と
 なる人々が増えて欲しいと
 願っているうちに、この一年
 で六人もの方々が、将来聖職
 となりたいのだけれど……と志
 願して下さいました。これま
 た奇跡のように思います。

イエスは興味本位や、自分
 の利益や自分の力を誇示する
 ために奇跡のようになわざを
 行つたではありません。そ
 こには、必ず、労苦し、奮闘

し、心配する当事者が居りま
 す。そして、そこにイエスが居
 合わせました。

私は皆さんとともに、ずつ
 とこの東京で起っている、そ
 してこれからも起るに違いな
 い、奇跡の当事者でありたい
 と願っております。

詩編の作者が静かに神を待
 ち、ホセアが神に悲鳴をあ
 げ、初代教会の人々が労苦し
 奮闘したこと、すべてが私た
 ちに当てはまります。その中
 で、みんな神に希望を見出し
 ました。そして、その希望はイ
 エスのなさった奇跡的なわざ
 で、むなし希望でないこと
 が裏付けられました。

今日のこの機会に、皆さん
 とともに、神さまの力の奇跡
 の当事者としてあり続けたい
 という、私の願いと祈りを分
 ち合っていただければうれし
 く存じます。